

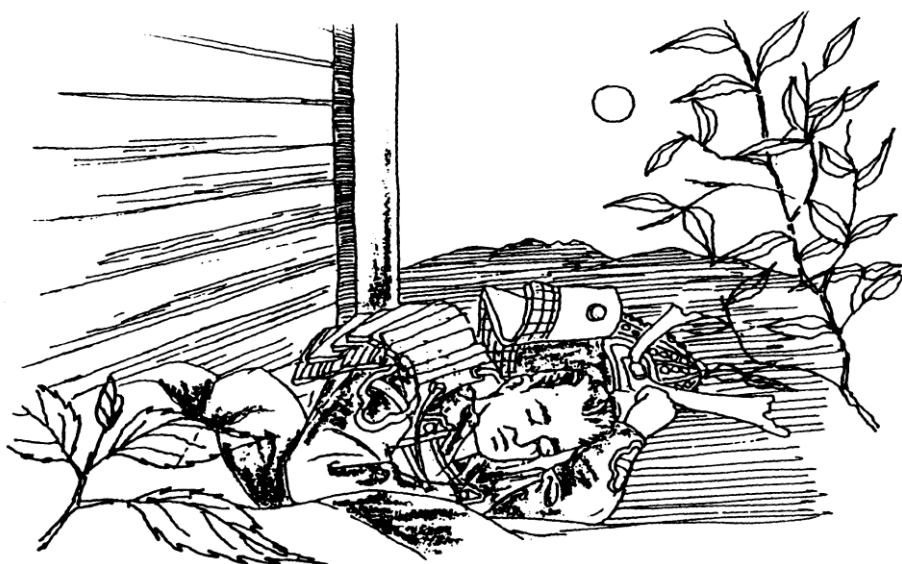
夜長物語

一

秋の半なかばの、月のいいある夜よふけのことです。京きょう

の都の町はずれに住んでいる片野少将かたのしょうしょうは、一人えん先にすわってせわしなく鳴いている虫の声や、おばなにふきそよぐ風の音を聞きながら、うつとりと月を見入っていました。

少将はこんないい月夜に、ただ一人静かに野道を歩いてみたらと思いついて、そっと、しおり戸を開けて



外へ出るなり、どこというあてもなく、足の向く方へぶらりぶらり歩き出しました。

間もなく、都の東の加茂かもの川原へ来ました。月の光はいよいよさえてきれいです。少

将は着物のすそを持ち上げて、流れの浅いところをざぶざぶわたって向こう岸へ上が

り、下手の大仏さまだいぶつや三十三間堂さんじゅうさんげんどうの方へ向かってまたぶらぶら歩いていきました。

やがて法性寺ほうしやうじの大屋根や稲荷山いなりやまを遠くに見ながら、まるで月によわされたようにうつ

とりと歩き続けていきますと、いつか、都をかなりはなれた木幡こはたの野まで来てしまいま

した。と、どこか、そこいらで、がやがやと人の声がするような気がしました。おやと

思っでじつと立って耳をすましますと、じき向こうの、よもぎがはえ続いた中から、大

ぜいで歌を歌っている声がかすかに聞こえてきます。そばへ行って見ますと、そこには

人間がらくらくと入れるくらいの大きなほらあながありました。歌の声はそのほらあな

のおくから出てくるのでした。

少将は、はてな、こんなあなの中にだれがいるのだらうと考えこんでいましたが、と

もかく話のたねにもなるので見とどけてこようと、足音をぬすんでこっそりと入って
いきました。

一一

ものの半町はんちようほども行きますと、あなの中は急に明るくなって、間もなく広々した平
地へ出てきました。

と、不思議なことには、外は月夜だったのに、ここではお日さまが大空にきらきらと
照りかがやいています。すぐ目の前には、きれいな小川がチヨロチヨロと音を立てて流
れています。その向こうに、目のさめるような美しい唐門からもんがあつて、それへ向けて朱塗しゆぬ
りの橋がかかっています。

少将しょうしょうは橋をわたつて、そつと門のなかをのぞいて見ました。しかし、そこからは人
のかげも見えませんが、歌の声は、おくの方からにぎやかに聞こえてきます。それで門を
入つてうら手へ回つてみました。すると、さつきからの歌は、その広い台所の土間で

大ぜいのねずみたちが歌っているのです。

「早^さなえの葉には、

いなごもつくよ。

とら毛のねこは、

声さえいやよ。」

と、声を合わせておもしろい節で歌いながら、二つならべた立^{たて}臼^{うす}で、しきりに米をついでいます。ほかのねずみはなべやかまで、せつせと何か煮^にています。井戸^{いど}から水をくんでいるのもいます。十二間^{けん}ほどもある竹^{たけ}ざおには、にわとりや魚が一ぱいつり下げています。ふふん、ねずみの大将^{たいしょう}の住居^{じゅうきよ}だなど少将は思いました。

なお、おくの方へ入っていきますと、右手には馬屋がずらりと立ちならんで、りつばな馬が何十頭となくつながれています。馬屋のとなりはたか部屋で、みごとなたかが五十羽ばかりも飼^かわれています。

今度は左手の方へ回ってみました。すると、そこは、りっぱな広庭で、四季の花が一時にさきみだれています。釣殿つりどのや高殿たかどのも美しく建ちならんでいてまるで絵のような景色です。

少将は夢でも見てるように、いつまでも、ぼんやりながめ入っていました。

と、にわかには表の方に馬のいななきがして、人ががやがやるけはいがしました。少将は、はつとわれにかえつて表へまわり、木かげからのぞいて見ますと、白いはちまきをした早馬はやうまの使いのねずみげんかんが、玄関げんかんへ着いたところでした。

使いのねずみは広間ひろまへ通されて、大将たいしょうのねずみにお目見えをしているらしく、次のように話し出すのが手にとるように聞こえました。

三

摂津せつづの西の宮に住んでいるねずみたちの家の小ねずみばかりがそろって、西の宮の恵比寿えびすさまのお社やしろへおそなえをぬすみにいきました。

摂津…現在の兵庫
県

釣殿…池に面した
建物
高殿…高い建物

ところが運わるく、お社の前のこま犬に見つかってほえたてられ、あわててにげ出すはずみに、一人残らず古井戸へ落っこちて、ぬれねずみになりました。で、やっとはい上がって、なきなき家へかけもどりました。親ねずみたちは、

「何をしてきたのだ。」としかりつけました。子ねずみたちは口をそろえて、

「恵比寿さまの拝殿の前で遊んでいたら、こま犬がいきなりとびかかって背中にかみついたの。」と話しました。それを聞くと親ねずみたちはすっかりはらをたてて、

「こんな罪もない小さなものをいじめておもしろがるとは、こま犬どのも大人げない。

ようし、これから社へおしよせて、社殿も鳥居もめちやめちやにかじりたおしてやろう。」

こう言って元気のいい若ねずみを、三百ぴきばかりくり出して、お社のとびらも柱も鳥居も何もかもめちやめちやにかじりたおして来させました。これには、恵比寿さまもひどくはらをお立てになって、

拝殿：神社にある
おいのりのための
建物

社殿：神社のさま
さまな建物

「あのにくいねずみども、一ぴき残さずねずみ落しにかけて、つぶし殺し、とびや、か
らすに食わしてしまえ。」と、こま犬にお命じになりました。

そこでこま犬は、ます落とすや、下げわなをどっさりこしらえて、ねずみの村の前方
へ、そこらじゅうにかけておき、村の後ろへ回って、うわあと、ときの声を上げました。

ねずみたちはびっくりしてにげ出すはずみに、どんどん、おとしや、わなにかかって命
をとられました。生き残ったものは、やっと五十ぴきにも足りないほどでした。

そのねずみたちがより合って、どうかして、恵比寿さまにしかえしをしたいものだ
と、いろいろ相談をしました。すると、しんるいのこうもりの四郎が飛んできて、

「恵比寿さまは、あす、お兄さまの月つきよみのみこと読尊をよんでお茶の会をするそうだ。今西の

宮の社には、りっぱな茶うすや茶道具を取り出してしたくがしてある。みんなですぐに
おしかけて、その茶道具をすっかりかじってやったらよからう。」と言いました。

ねずみたちは大喜びで、さっとおしよせて、きれいにそうじをしたお部屋へ、ごみ、

あくたをまきちらし、茶うすにはおしっこをひっかけ、茶道具はかじつたりこわしたりして、何一つ使えないようにして、かちどきを上げてかえってきました。

かちどき…戦いに勝ったときに上げる声

恵比寿さまは、弱っておしまいになり、いそいで月読尊のおやしきへ使いをお出しになつて、都合でお茶の会を日のべしますからとお知らせになりました。

日のべ…先のばしにすること

ねずみというものは、すべて、比叡山ひえいざんの大黒さまだいくの家来けらいなのです。恵比寿さまは、大黒さまへこま犬こまぬいを使いにお出しになつて、西の宮のねずみどもが、これこれこういうひどい乱暴らんぼうをします、ほかのねずみたちへの見せしめに、一ぴきのこさず打ち殺しますから、ごしようにおき下さいと、お話しになりました。

大黒さまは、それをお聞きになると、

「わしの家来たちが、そんな悪いいたずらをするはずがないが、とにかく茶うすと茶道具をさし上げるから、それでかんべんして下さるように。」とおっしゃって、すぐに打出うちでの小づちこづちを一ふり、おふりになりますと、恵比寿さまのこわされた茶うすや茶道具より

も、ずつとりっぱなのが飛び出しました。それをこま犬に持たせてお帰しになりました。

こま犬が帰って、そのことを申し上げますと、恵比寿さまは、

「何？ 大黒の家来だいこく けらいがそんないたずらをするはずがないだって？ 何をふざけるのだ。

このうすや茶道具をつつかえして来い。ねずみどもは一ぴきだって生かしてはおけない。」

と、ぶんぶんおおこりになりました。

こま犬はまた大黒さまだいこくへ言いに行きました。すると、お人のいい大黒さまだいこくも、むつとなさり、

「そんなにまで無理を言うなら、こちらにも考えがある。おれの家来のねずみたちに指一本ふれても、かんべんしないぞ。」とまっ赤になって、おおこりになりました。

こま犬はびっくりして、にげて帰りました。恵比寿さまは、

「ようし、そういうことなら摂津せつのねずみどもを残らずとり殺した上、比叡山ひえいざんへせめよ

せよう。」とおつしやつて、大いそぎでこま犬を龍宮へ使いにお立てになり、軍ぜいをおくるようにおたのみになりました。

四

龍王は、すぐに海中へふれを出して兵を集めました。総大将には、体が八ひろもある熊罠三郎をえらびました。魚では、すずき、かれい、とびうお、かつお、まながつお、ぶり、はも、いるか、はまち、さわらなどがどんどん集まってきました。

伊勢の赤鯛は、緋おどしのよろいを着こんで、兄弟のあかめ鯛や、チヌ鯛といっしよに勇みたつて出てきました。

貝の一門では、にし、さざえ、いたら貝、いたや貝、たいら貝、あわび、はまぐり、かき、赤貝、夜泣貝などが、ほら貝をぶうぶうふき立てながら勢ぞろいをしました。たこや、いかも手旗をはたはたひらめかせて集まりました。

熊罠三郎は、この総勢十万人八千騎をひきつれて兵庫のはまべから西の宮の海へかけて

ひろ：一ひろは
一・八二六メートル

緋おどし：緋色
(火のような赤)
の糸や皮で編んだ
よろい

陣をかまえました。

五

これをお聞きになった大黒さまは、急いで比叡山に城をおかまえになって、都中と、

丹波、近江からありとあらゆる、白ねずみ、黒ねずみ、野ねずみ、山ねずみ、二十日ね

ずみ、針ねずみ、木ねずみ、じゃこうねずみ、どぶねずみをお集めになり、その中で、

もつとも勇名のなりひびいた、鳴尾次郎穴住を総大将におえらびになりました。総勢

十万余騎。

大黒さまはすぐに加茂川、雲母坂までおしかけよとご命令になりました。と、そこへ、

恵比寿方から使者がきて、手紙をおいていきました。あけてごらんになりますと、

「大黒どのの身さまのいやしいことよ。色は黒くて、背が低くて、横太りのその体つき

は、ちようどくじらの輪切りのようだ。かたにかついだふくろには、さとう豆やとうふ

のくさったのが入れてあり、足にふまえた俵には、くされかけのえんどう豆がはいつ

丹波：現在の京都府や兵庫県のあたり
近江：現在の滋賀県

ているのだろう。なにしろ足が短いので、戦場に出たらあひるのように見えるだろう。かけることも自由ではあるまいから、いつそ今のうちに降参こうさんしてしまつてはどうか。今度ばかりは、おんびんに、ゆるしてあげる。」と、書いてありました。大黒さまはそれからとお笑いになり、すぐにこんなご返事をお書きになりました。

「恵比寿どのこそ生まれて三つになるまで、ほねもなく、皮もなく、足もこしもちえもない、ひるの子ではなかつたか。それが舟に乗せられて海へ流されたのを、龍王りゅうおうのなすけで養われて、やっと人間になり、西の宮に住んで、諸国しよこくの商人うわまいの上米をもらい、海で魚をつつて、その日その日を送るとは、まったくあわれなお身の上だ。とにかく今のうちに降参してしまつた方が身のためだよ。」

大黒さまは、鳴尾次郎の長男の穴住太郎あなずみたろうをおめしになつて、

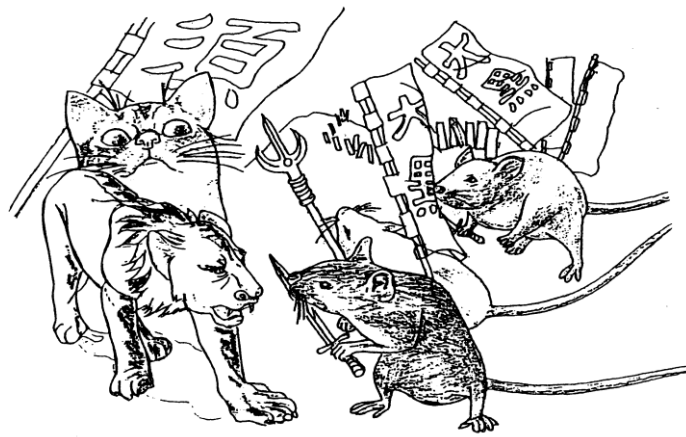
「すぐはやうまに早馬をとばして敵の陣てきじんへこの手紙を届けておいで。とちゅうでねこ太郎たろうに行き合とびのすけうなよ。鳶之助にも気をおつけよ。」とお言いわたしになりました。

穴住太郎は馬にむちをあててかけ走り、敵の陣屋へ手紙をとどけました。その帰りに、
山崎街道で、おそろしいとら毛のねこが出てきて、ひげをさ
か立てて「にやおー、にやおー。」と鳴きまくりました。武勇
な太郎も、やはりねずみだけに、これにはきもをつぶして一
さんににげかえり、比叡山の坂下まで来てやれやれとむねを
なで下ろしました。

六

いよいよあくる日には、恵比寿方の軍勢は四条の御室と恵
比寿町に陣をとり、大黒方は二条の河原町と大黒町に陣を
しいて、たがいに大旗小旗をなびかせ、ほこをきらめかせて
にらみあっていました。

七



ちようどこのとき、支那しなの布袋和尚ぼていおしょうが、大和やまとの国の達磨寺だるまじへ参詣さんけいしようとおもつて
わたつてきました。

和尚おしょうは、達磨寺だるまじのおまいりをすますと、ついでに都を見物けんぶつしたくなりました。都では
まず東福寺とうふくじへ参詣さんけいし、通天橋つうてんきょうを渡わたつて法性寺ほうしやうじへまいり、それから南禅寺なんぜんじへ行いこうか
と思おもつて歩き続けました。すると三条さんじやうの方にひどいすなけむりが上がっています。不
思議ふぎに思おもつて、人にわけをたずねますと、恵比寿えびすさまの軍ぐんぜいと大黒方だいこくの軍勢ぐんせいとがぶ
つかり合あつて、大激戦だいきせんをしているのだといひます。和尚おしょうはびつくりして、両軍りやうぐんへわけ
入いつて、

「よして下さい。ひいて下さい。福の神ともあろう方が、貧ぼう神ひんぼうがみのようにいがみ合あひ
をするとは何事なにことですか、つまらない争あらそいいに血ちを流ながすのは神仏しんぶつの道みちにもそむきます。どう
か両方りやうはうの友ともだちであるわたしの顔を立たてて、きれいに仲ななおりにして下さい。」と真心まごころを
こめてたのみました。恵比寿えびすさまも大黒だいこくさまも、その言葉ことばにはじ入いつて、すぐに仲ななお

りをなさることになりました。

八

ここまで話すと使者のねずみは息をついて、

「いろいろご心配をかけましたが、ただ今申し上げましたようなわけで恵比寿、大黒のお二方ふたかたをはじめ両方の主かたがただった方々が集まって、二条にじようの富小路とみこうじでお祝いのお酒もりをなされます。あなたさまをはじめ、ご家来けらいの方々もおそろいで、どうぞこれからすぐにお出かけ下さいますように。」と言いました。

それはありがたい、とねずみたちは大喜びで、使者ねずみの後についてぞろぞろとあなを出て、二条にじようへ向かいました。少将しょうしょうもおもしろ半分に、ねずみどもの後をつけていきました。

あなの中は、明るい真昼でしたが、京の町へ来ますと真夜中で、町々は、しいんと音もなくねはずまっています。ねずみたちは富小路とみこうじへ来ますと、ぞろぞろとある家へ上が

りこみました。少将も後からそつと上がって、ついたてのかげからのぞいて見ますと、恵比寿、大黒、布袋和尚ほていおしょうに、こま犬などがずらりとならんでおり、間もなく、にぎやかな酒もりがはじまりました。だんだんよいがまわるにつれて、布袋さまは、いいきげんになり、

「どうだ一ばん角力すもうをとろうか。」と大黒さまに言いました。

「よかろう。さあ来い。」と恵比寿さまを行司ぎょうじにして取っ組みました。なにしろ二人とも角力の名人なので、たがいに秘術ひじゅつをつくしてもみ合いましたが、なかなか勝負がつきません。

「どうなることか。」と少将しょうしょうは手にあせをにぎって見つめていますと、やがてどしんと大きな音がして、「かったかった。」と言う声がします。どちらが勝ったのかと少将は乗り出して見ようとするはずみに、ひよいと目がさめました。

気がついてみると、少将は、自分のやしきのえん先にすわったまま、ついうとうと

ねむりこんでしまったのでした。よほど長い時間がたったらしく、さつき夜空に照りかがやいていた月は、いつのまにか白くうすれて、もう嵯峨野の果てへしずもうととしていました。
